

カラス

深川医師会
深川市立病院

代田 剛

4月中旬のある晴れた日のことである。玄関前の外のちょっとしたスペースでタイヤ交換をしていた。いつもより近くで、うるさく鳴いているカラスの鳴き声に気付いたが、そのまま作業を続けた。しかし、あまりに鳴き声が続くので、鳴き声の方角に目をやった。不思議なことにその姿が見えないのである。声はすれども姿は見えずである。目を凝らして探してみたところ、見えないわけが分かった。住宅地の狭い道路を挟んだ向かいの家の敷地内に巣を作ったからである。詳しく書くと、門を入ってすぐのところアカマツが植えられている。その木に巣を作って鳴いているのである。アカマツは植えられて40年以上が経ち、芯が止められているので木の高さはせいぜい5～6mである。幹より伸びた数本の枝はしっかりと太く成長していて、その幹と枝の間の高さ4mくらいに巣を作ったのである。私が作業しているところからは斜め上を見上げる形となり、巣の底を見るだけで、巣の中に入って鳴いているカラスの姿は見えないのである。たくさんの小枝を集め、巣は頑丈に作られているようだ。困った。春の子育ての時、カラスは人間に対して激しく攻撃すると聞いていたから。外出のたびに巣から直線距離で数m下を歩かなくてはならない私と家族は、襲われる率が高い。もちろん向かいの家の家族も。まずはお向かいさんとお話である。でもお向かいさんご家族は旅行に出ているらしく不在である。それでカラスの生態と習性を調べた。普通見られるのはハシボトガラスとハシボソガラスで、この2種の間ではある程度の違いがあることを学んだ。それによると顔つきと鳴き声から区別ができるとあったので、わが家の2階から望遠レンズを通して巣の中にいるカラスを観察した(写真)。顔つきはハシボソガラスに見え、鳴き声もハシボソガラスに矛盾しないと考えられた。座っているのだから、抱卵中と思えた。そうすると連休が少し過ぎた頃にヒナが誕生する計算となる。その頃から神経質となり、攻撃性が高まるはずである。逆に言えば今は危険ではないので、やり過ぎすことにした。いずれにしても、お向かいさんが旅行から帰ってきてからである。

そんな人間様の思惑とは一切関係なく、カラスは抱卵を続けた。テレビなどでは、オスが抱卵中のメスにせっせと食べ物運ぶ様子を映し出しているが、このカラスはそうでもないようだ。確かに1羽巣にいるのを見る時もあるが、1羽も見られない時

もよくある。メスが巣から離れた時にはしっかりとオスは守ると書いてあったが、この番においてはどうも違うようだ。メスが巣からよく出ていく。それもトイレタイムのように短い時間ではなく、ある程度の時間は離れている。その間はオスが巣にいるかということすらでもない。カラスも人間社会と同じように、家族の関係が変わってきたのだろうか。

やがてお向かいさんが旅行から帰ってきた。奥さんは陽気で、高齢者であるが活発な人である。敷地内にカラスの巣があるのを知り、すぐに除去しようと長い棒を持ち出したが、さすがにここは思いとどまった。それから何日も経たないうちに業者が巣をきれいに取り外した。日中であつたので、カラスが抵抗したのか、留守を狙って混乱なく済んだのかは私には分からない。その後カラスは、巣がなくなった向かいの家を時々訪れている。わが家の屋根にも止まっていることがある。

一件落着とはならなかった。カラスは縄張りを持つので、その中で生活を続けると書かれている。特に繁殖期は巣が壊されても、その期間中に新しい巣を作り、新たな抱卵を始めるとある。ハシボソガラスの繁殖期は、3月中旬から7月である。5月上旬に巣が壊されても、期間としてはまだまだ余裕がある。早速新しい巣作りを始めた。嘴を上手に使い、わが家に植えてあるブドウの木の幹の皮を剥いで持ち去ったり、ブドウの枝を支柱に結わえておいた紐のノットをほどこいて嘴に咥え飛び去った。これらは巣の中での産座に使うためである。飛び去った方角に巣を探しに行ってみた。わが家からは直線距離では60mくらい離れたところにニセアカシアの並木がある。どれも30mほどの高さとなっている。その中の1本の地上から15mくらいのところに巣があつた。

春はこれで終わったが、夏以降が思いやられる。わが家はこのカラスの完全な縄張り内である。わが家の敷地内の小さな家庭菜園でできたものが、このカラスに狙われるであろう。数ヶ月の私の汗と努力の結晶が奪われてしまう。そうならないようにカラスとの知恵比べである。脳重なら50倍以上と自負するが、それだけの知恵が私にある自信はない。

